

ゼミ募集にみる学生の応募動機と募集プロセスの検証

eポートフォリオによる自己PRへの展開

宮崎 誠^{†1} 常盤 祐司^{†1} 廣川 みどり^{†2} 田村 晶子^{†2}

†1 法政大学 情報メディア教育研究センター

†2 法政大学 経済学部

makoto.miyazaki.dc@hosei.ac.jp

概要：大規模な学部によるゼミの募集，応募に特化したWebシステムを開発し，2012年度の選考より導入している．システム化することによりゼミに応募する学生の動機やゼミへの配属の結果について詳細に把握・集計することが可能となった．本報告では2012年度での合計4回の選考を検証する．また，2013年度からは，より自由な自己PRができるようにeポートフォリオによる応募も取り入れた．

1 はじめに

法政大学経済学部は，1学年の学生数が700～900名程度であり，例年，ゼミの募集や応募は，募集票や応募票といった，紙ベースで実施されてきた．そのため紙ベースでの選考では，学生および開講するゼミの数が多くなればなるほど，膨大な事務作業が発生することになり，事務作業を含めた，ゼミ募集のプロセスの改善が求められていた．そこで，2012年度よりこれらゼミの募集，応募に特化したWebベースのシステムである「ゼミ募集システム」を開発し，約70のゼミにて学生の選考を行っている[1]．

本稿では，2012年度のゼミ募集システムに登録されたデータから学生の応募動機について分析する．また，2013年度からは，eポートフォリオシステムと連携し，学生がより自由に自己PRができる環境を構築したので報告する．

2 2012年度ゼミ募集

2.1 選考プロセス

基本的には，紙ベースで実施してきた従来の選考プロセスを基本としてゼミ募集システム上に実現している．そのため教員，事務ともに大きなトラブルもなく募集を終えることができた．本選考は，次年度春から開講するゼミの学生を選考することが目的であるため，例年，秋に募集を行うことになる．大まかな選考プロセスを以下に示す．

[第1次募集]

- (1) 教員は，ゼミ基本情報を登録し，ゼミを紹介したPDFをアップロードする．
- (2) 教員は，各学年の定員や選考方法などを設定し，募集情報を登録する．
- (3) 教員は，募集情報をプリントアウトし，事務に提出する．
- (4) 事務は，ゼミの募集票を掲示板に掲示する．
- (5) 学生は，趣味や資格などを含めた個人情報を登録する．
- (6) 学生は，自己PRや備考を入力の上，希望するゼミに応募する．なお応募できるのは，一つのゼミのみである．
- (7) 学生は，各ゼミの応募状況を確認し，応募先を変えたければ一度だけ変更することができる．
- (8) 教員は，応募の学生を確認し，面接やレポート，試験などの方法で，選考を実施する．
- (9) 各ゼミは，面接や試験，レポート等で，応募した学生の選考を実施する．
- (10) 教員は，学生の可否を登録する．
- (11) 教員は，合格者一覧をプリントアウトし，事務に提出する．
- (12) 事務は，合格者一覧を掲示板に掲示する．
- (13) 学生は，可否を確認し，合格の確定を設定する．
- (14) 教員は，合格が確定した学生を確認する．

第2次募集以降も，基本的には，第1次募集と同じプロセスで実施するが，第2次選考では，(7)の過程を省略し，(6)の過程において，複数のゼミ

表 1 各募集における合否数

	第1次募集	第2次募集	第2次追加募集	第3次募集	合計
合格	419	318	10	37	784
不合格	353	918	5	12	1,288
合否保留	3	3	0	32	38
合計	775	1,239	15	81	2,110

表 2 各募集における自己 PR 入力平均(byte)

	第1次募集	第2次募集	第2次追加募集	第3次募集	平均
合格	976.5	962.1	773.0	580.3	823.0
不合格	914.6	933.1	817.8	698.9	841.1
合否保留	940.0	822.3	0.0	934.5	674.2
平均	943.7	905.9	530.3	737.9	779.4

に同時に応募することができるとしており、決められた期間内にゼミが決定するような工夫をしている。例年、第3次募集まで行っているが、2012年度は、急遽、教員による強い要望により第2次と第3次の募集の間に、追加募集を実施したため、計4回の選考が行われた。

2.2 合否結果レビュー

システム化されたことにより、業務が効率化し、応募状況や選考結果がリアルタイムに見ることができるようになっただけでなく、選考上で入力されたさまざまなデータが取得可能となった。4回の募集の合否結果を表1に示す。第1次募集から第2次追加募集の3回の選考について、ユーザ登録のみであった36名の学生を除き、ゼミの受講意思のある応募を実際に行った学生は805名であった。第3次募集は、年度初めに新しく着任した教員のゼミを募集している。第1次募集では、人気のある特定ゼミへの応募の偏りを軽減することを期待して、ゼミの変更する期間を設けた。これによりある一定の平準化が行われた結果、第1次募集で半数以上の学生が決定している。一方で、第1次募集から第2次追加募集での不合格の学生について調べたところ、128名(約16%)の学生が3回の募集で全て不合格となり、ゼミが最後まで決まらなかったことが判明した。

2.3 自己 PR レビュー

学生が応募の際に登録した自己 PR 文の入力状況について表2に示す。応募の際には、400字程度の文字数制限を設けたが、ほとんどの学生がそれよりも多い文字数を使って、熱心に自己 PR 文を書いていた。しかしながら、選考が第1次募集、第2次募集、第2次追加募集と進むにつれて、入力された文字数が減っていくのが分かる。自己 PR は、どうしてもこのゼミに入って学びたい、という学生の熱心さ、モチベーションと関連していると予想するならば、第1次募集、第2次募集でゼミに合格できなかった学生は、第2次追加募集、第3次募集で合格したとしても、モチベーションが低かったり、あるいはアンマッチを起こしている可能性がある。

また、合格した学生と不合格であった学生の自己 PR 文について対応分析を行った(図1)。合格であった学生は「仕事」「問題」「英語」等の単語が並んでおり、これらのテーマに関心のある学生が合格しているのが分かる。一方、不合格であった学生は「スポーツ」「練習」「気持ち」「続ける」等のキーワードが並び、どちらかという精神論に近い内容を自己 PR として書いている学生だということが分かる。

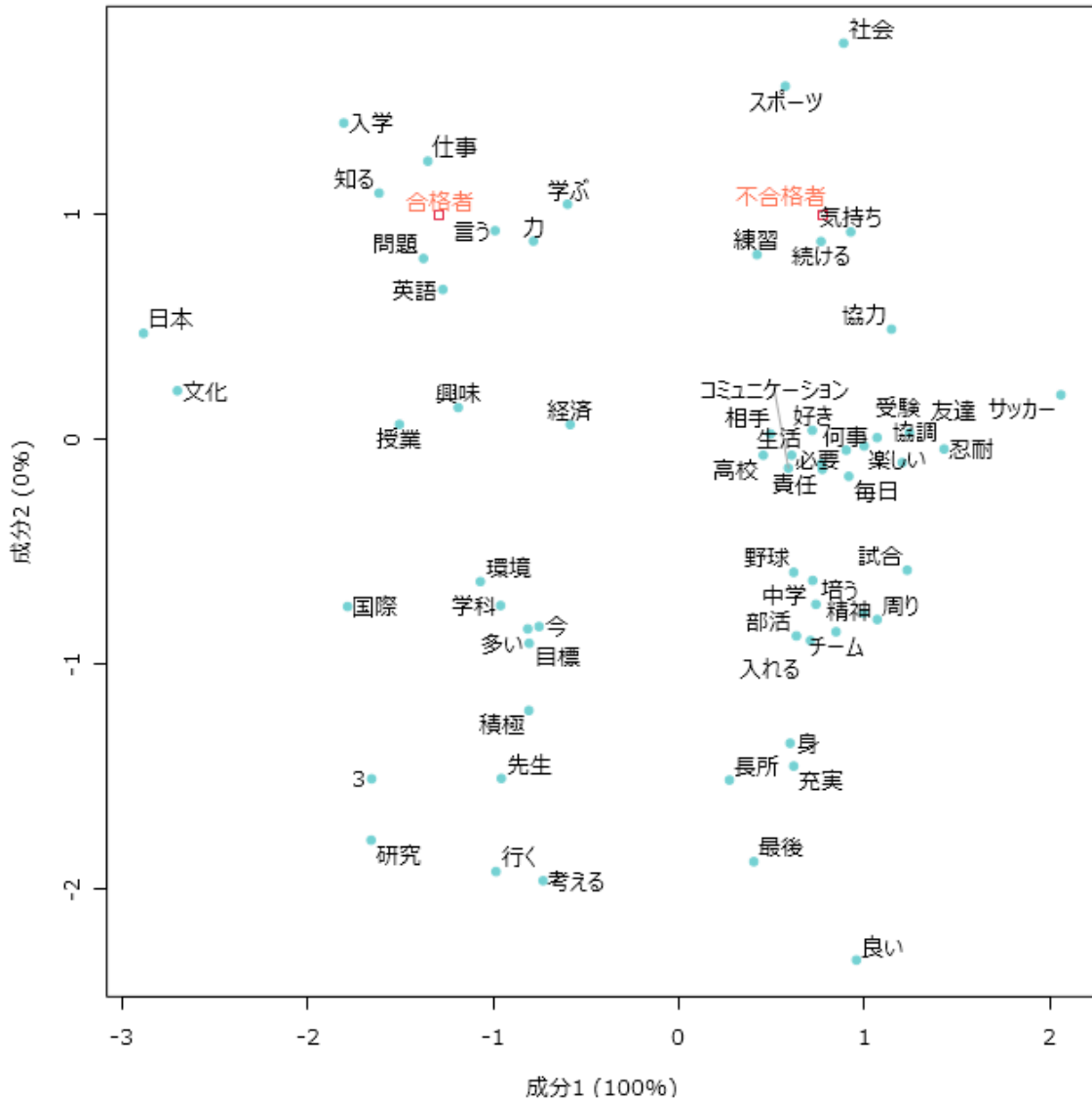


図 1 合格者と不合格者の応募自己 PR 文の対応分析

3 2013 年度ゼミ募集

3.1 2012 年度からの変更点

選考プロセスについては、2012 年度と大きな変更はないが、複数のゼミに応募可能な第 2 次募集では、複数のゼミに合格する学生いるためせっかくゼミの合格を出しても辞退して、別のゼミに決める学生も当然出てくる。そのため、2012 年度の第 2 次募集終了後には、追加で急遽選考を実施した経緯があり、学生の合否を決定後も、予定した合格者が辞退した場合に追加合格が出せるようにして欲しいとの要望があった。2013 年度の選考は現在実施中であるが、第 2 次募集以降の複数応募可能な選考については、追加合格が出せるよう

システム改修を図っている。

また「2.3 自己 PR レビュー」で示したように「一般的に日本人の学生は自己 PR が苦手である」というイメージとは逆に、「希望するゼミに入りたい」というしっかりとした目的があれば、熱心に自己 PR が書けることが分かった。後日、行った学生へのアンケートにも「もっと自由に自己 PR ができると良い」という意見もあり、2013 年度より自己 PR の方法として e ポートフォリオによるエントリーシートの作成を行っている。

3.2 e ポートフォリオによるエントリーシートの作成

学生は、ゼミ募集システムにて希望のゼミへ応募する際に入力を指示していた自己 PR 入力フォ

ームを廃止し、代わりにオープンソースの e ポートフォリオシステム Mahara へのリンク表示している。学生の応募までの手順は以下の通りである。

- (1) ゼミ募集システムにログインする。
- (2) 趣味や資格などを含めた個人情報をゼミ募集システムに登録する。
- (3) ゼミ応募画面のリンクから e ポートフォリオへログインする。
- (4) e ポートフォリオシステムにて希望するゼミのエントリーシートをコピーして自己 PR などの必要な項目を入力する。
- (5) ゼミ募集システムシステムにて希望するゼミに応募する。

学生は、2 つのシステムを使わなければならないが、LDAP による同一 ID、パスワードによる認証、コピーと編集という簡素化した操作によるエントリーシート作成により、特に迷うことなくエントリーシートを作成している。また、今後、希望するゼミについては、ゼミ募集システムの合格者データを利用して、ゼミのグループを作成する予定である。同じ学習目的を共有し、さまざまな学習段階や経験を持つグループは、学生同士の学び合いを活性化する学習コミュニティの形成が期待できる[2]。

4 まとめ

ゼミ募集を上から Web に移行したことにより、ゼミの募集プロセスにおけるさまざま分析が可能となった。募集回を重ねるにつれ自己 PR の入力文字数が減少しており、学習へのモチベーションの低下やゼミへ入ったあとのアンマッチが懸念される。また、できる特にゼミをとる意欲のある学生であっても、なかなか合格がもらえない学生の存在が浮き彫りになった。やはりできるだけ多くの学生が希望するゼミに合格できるようにすることが望ましく、ゼミの選考プロセスに応募の変更期間に加え、2013 年度の選考では追加合格を導入したことによって、合否がどのように推移するか選考が終わった後、検証する。

参考文献

- [1] 宮崎誠, 常盤祐司, 田村晶子, 宮崎憲治, 「ゼミ募集システムの開発」、大学 ICT 推進協議会 2012 年度年次大会論文集、2012/12
- [2] 宮崎誠, 鈴木靖, 「学習コミュニティとしての e ポートフォリオシステムの試行」、情報処理学会研究報告、Vol.2011-CLE-6、No.8、2011/12